

『正信念仏獨・讃歌』 釈寒林澗



道の辺の 芽を出しける 雑草も
縁のなしたる 相なりけり
綽空善信親鸞と 名名いただきし ことわりは
阿弥陀如来の 願いなるかな
決着は 阿弥陀任せの ことなりき
己がはからう ことにはあらじ
聖し観よ 弥陀の鏡で 我が身をば
地獄行く身の 所業そのもの
道ひとつ 他力行じの 歡喜道
難行は 自力頼みの 心なり
証すとは 阿弥陀如来の はからいぞ
己がはからう ものにはあらじ
唯信じ 唯いただくの お慈悲にて
はからいなきこそ うれしかりけり
明日ありと 思うころに だまされて
慈悲に気づかぬ こそ悲しき
浄土をば 我が今の世に 仰ぎ見る
こそ楽しき 一日なりけり
土に生き 土に生きたる 我が父は
土の中なる 阿弥陀に出遇いぬ
可や不可と 惑い來たりぬ 己が身に
可も不可も無し ことを占めせり
通いあう 往還二回向 ありてこそ
救われし恩 謝する道なり
入り口は どこにと弥陀に 尋ぬれば
南無と頼めよ そこが入り口

瀬部七ヶ寺 運善寺

今月の御旧跡は、尾張の
木曾川河畔にある日比野と
いうところにある、瀬部七ヶ
寺の一つ、運善寺です。

関東から京都へ帰洛され
た親鸞聖人は、各地で念仏
の教えを広められ、三河で
は、熱心な門徒たちにより、
平田道場・赤波道場・和田道
場など多くの念仏道場が出
来上がりました。

続く尾張でも、瀬部七門
徒と呼ばれる人々が活躍し
て、初期の念仏道場を形成
したようです。

瀬部七門徒の寺の一つの
運善寺には、入信房の木像
があります。

寺伝によりますと、座像
の入信房は、関東二十四輩
十六番・野口の寿命寺の開
基、入信としています。入信

運善寺山門から本堂

運善寺には、入信房
木像の他、親鸞聖人と
二尊が連座する二
尊連座像など、多数
の宝物がある。



房は、親鸞聖人御帰洛の後、
聖人に念仏の教えを尋ねる
ため、上洛されたといま

ある時、入信房が、上洛
する途中、大津にて同宿し

た、七人の商人の横で、熱
心に念仏を称えていました。
商人たちは、その熱心さに
わけを尋ねると、「親鸞聖人
より他力の念仏を授かり、
称えている。」と答えました。
その後、七人は、入信ともに
京にいき、親鸞聖人に会って
みると、たちどころに真宗
念仏に目覚め、門徒として、
道場を開く身になつたとい
います。

入信が亡くなった後、親鸞
聖人より、入信の木像を授
かつたのが木像の始まりと
言われます。

ところで、入信房と言え
ば、二十四輩十八番大曾根
の常福寺の開基も同名です。
常福寺の寺伝では、開基の
入信房は、尾張の日比野の
運善寺にて往生したとして
います。

二人の偉大な高弟が、こ
の運善寺で結びついています。